

絵本の夜・紙芝居の朝

vol. 8



もうすっかり秋ですね。

夏の間放置していた部屋の書棚を久しぶりに整理していたら、古田足日の

『大きい 1 年生と小さな 2 年生』が出てきて、手に取ってページをめくるうちにいつしか本の整理を忘れ、本格的に読み耽ってしまいました。

奥付を確認すると初版 1970 年と記されているので、これは私が生まれる前に出版された本です。

作中では、当時の子供達在日常的に使っていたと思われるやや古風な言葉遣いのやりとりが活写されており、その今となっては少し古びてしまった話し言葉がとても素敵です。

主人公のまさやは背が高くて、まだ小学 1 年生なのにとときどき 3 年生に見間違えられたりする少年です。

大柄な見た目に似合わず泣き虫で臆病な性格で、通学路の途中にある暗い崖の道をひとりで歩くのが怖くて女の子に手をつないでもらわないと通れない……と、こうしてあらためて書き出してみると、つくづく私の子供時代はまさや君そのものだったなあと思いますが、それはともかく、武蔵野特有の、見晴らしのいい丘と畑の向こうに集合住宅が続く少し寂しげでノスタルジックな風景が物語の背景として描かれていて、とても印象的です。

実は以前、私はこの作品の舞台になった東久留米を訪れ、まさや君の小さな冒険の目的地だった「一本杉の森」を実際に探し歩いたことがあります。

この作品が書かれてからすでに 50 年あまりの時間が経っている訳ですから無理ありませんが、物語に出てくる様な風景はもはやほとんど見られませんでした。

予想していた通りホタルブクロはどこにも咲いていなかったし、牛小屋も見当たりませんでした。

まさや君がいつも怖がっていた通学路の暗い坂道のあたりも今ではすっかり造成されて、もはや何の変哲もない一般道路と化しており、カラスの不気味な鳴き声のかわりに、頻繁に通る自動車のエンジン音が聞こえてくるだけでした。

でも神社や雑木林など、市街地の到る所で澄んだ水が湧いていて、そこだけはまだかろうじて物語の世界がわずかに残っている様でした。

「一本杉の森」は結局どこにあるのか今でもわからないままですが、東久留米の街は暇な時になんとなく訪れて歩きまわるお気に入りの場所のひとつです。

さくらももふみ
佐倉桃史®

『大きい 1 年生と小さな 2 年生』 古田足日 作
偕成社 1970 年